【新刊紹介】

津金仙太郎著：信仰物理学者・日下部四郎太

（中央書院　¥ 750）

岡田武松の「続測候瑣談」に「今のは誰だい」という章がある．岡田が東京帝大の寄宿舎に，日下部四郎太と同室で寝台をならべていたときのことである．隣の部屋には本多光太郎が大学院学生として入っていた.「ある晩にもう消燈後でウトウト寝付いたと思うと，日下部がブイと一発大きなやつを放出した，すると寝入りばなの本多先生，この砲声に目を醒まされ〝今のは誰だい〟」

この章の一つ前にも日下部のことが出ている．水を飲む時に「栗山（茂太郎・熊本測候所長）さん，栗山さん」と三度唱えると決して当らないというのを引いたのち「夫を後年仙台の故日下部四郎太さんが，誰からか夫を聞き嚙り，「二人行脚」という本に，測候所測候所と三辺唱えると，水を飲んでも当らないなんて，語路の悪い俗悪なものに書き換えたから，トント面白くもおかしくもないものになってしまった」

大正８年，大日本雄弁会から発行された「二人行脚」にはそこのところを次のように書いている．（骨折）五九郎「晴模様あり区々の風，但し所によって雨というような予報は，実際八卦以上かも知れませんね．いつかの新聞にこんな話がありました．ある博士が鹿児島の田舎に旅行した際に，百姓が水を飲んでいるから，衛生上危険でないかと注意したところが，その百姓は，なーに，測候所測候所と三辺唱えて飲めば，大丈夫ですと答えたそうです」

日下部四郎太は現東管台長日下部正雄，元予報部長，現専修大教授日下部文雄の父上にあたる人．（明治８年～大正13），東北帝大理科大学の創立当時から活躍した独創的な物理学者である．大正３年学士院賞をうけた「岩石の弾性」についての研究は，師・長岡半太郎の影響のもと，完成されたものであったが，当時の統計的，記述的な地震学を，さらに地震波伝播の機構にまで立ち入って論じたもので，地震予知の可能性まで示唆した重要な論文である．日下部が物理学会で発表した「時の素量について」という論文は早くから寺田寅彦によってその独創性が注目されたもので，時代に先んじた業績かもしれぬといわれている．

日下部四郎太の評伝を書いた津金は東北大理学部出身の数学者，現在高校の教師をしておられるが，この評伝は1972年の後半に山形新聞に連載されたものである．著書はその「あとがき」で，「連載にあたり文体のことがしきりに気になった．私はモデルを伊藤整の「日本文壇史」に求めた．一見平明だが，奥行もあり，適度のエロ気もある文体．今思えば冷汗ものであるが，私は真剣であった」とのべているが，文壇史にのっとった評伝としての構成は成功していると思う．すなわち本書は日下部を中心とした東北帝大理科大学（現在の東北大理）の創設期の歴史としてよむことができるのであって，それは明治から大正にかけての学界史の一コマとして描き出されているのである．

津金は日下部について，次のように述べている．（本書 251Ｐ）

「四郎太の言動には陰陽二つが奇妙に混交していたのは弟子の誰もが証言している．迷信をくだき仏説を突破し，生殖器説までたどる思考は毎回のことだが，その滝のごとき熱弁のあと，きまって嘘のような不気味な沈黙がくるのである．身近にいなければならぬ助手の菊田（善三）には師の弁舌より暗い沈黙が怖いのであった．

このときも，まるで言葉を失った者のように，四郎太は（蔵王の）お釜の観測に没頭するのであった．自記寒暖計を喰いいるように凝視していたかと思うと，湖面の気泡の分析に，湖岸の岩石検査にと狂ったように動きまわるのであった．弟子の菊田には，師の頭脳の中に沸騰している理論をつかむことが容易にできかねていた」．

津金をとらえたのは，おそらく日下部のこの二面性―心理学者はこれを分裂症というかもしれぬ―ではなかったと思う．真面目一方の学者なら，その生活は誠に地味なもので，小説的評伝の対象とはならないであろう．寺田寅彦との対比は本書でもいくらか試みられているが，日下部には寅彦における文学と科学との二面性と同じような面があったのであって，寅彦自身これを日記の中で次のように評価している．（本書Ｐ．5）

「大正九年八月三十一日

Kが日下部君の〝二人行脚〟を見て日下部君は気が狂っているといった．その中の記事で Geschlechts organ（性器）に関する事を殊さらな手まねをし顔をゆがめて話すのを見聞きしていたら胸が悪くなってきた．

Kは文学上のObject（対象）その物と作者の見方，表わし方というものとの区別が分らない男である．〝二人行脚〟は読まないが，Kの represent（言う）ほど不快なものではあるまい」

学者の二面性はたとえば湯川秀樹氏にも見られるところであって，一方が駄目なら他方に遊ぶというようなところは〝遊学〟というにふさわしいが，外国ではたとえば英国の C. P. Snow が，この二面性が失われたところに，現代の専門化した科学の不幸をみているのである．学者のスケールの大きさは，この二面性によって支えられているように思う．

東北大名誉教授半沢正四郎（地質学）は「ああ日下部先生の信仰物理ね…．困りましたね．あれには…」と往時を回想し苦笑いを浮かべていたというが，確かに〝二人行脚〟を開き巻初2枚めのグラビア写真に1ページ大の貞操帯（日下部はこれを〝みさをのおび〟とよませている）の写真が出てくると，大学教授ならずとも度胆をぬかれるのである．日下部の人間的理解には，この〝二人行脚〟をどう評価するかにかかっていると思う．津金のこの伝説は新聞に毎日連載された評伝という制約もあって，本書ではこの点が十分評価されているとは言いかねるが，評者は一つの見方として次のようなことが言えるのではないかと思う．

日下部は迷信を退治するのに迷信が科学的に誤っていると，あからさまに言うようなことはしなかった．彼は迷信と同じような言語遊戯や，アナロジカルな飛躍した論理を真顔で語ることにより，迷信を信ずる人に自信をなくさせることができたのである．彼によるとこの世の生と死を二つながらのみこんでいる人間の根底はセックスであり，ちょうど力学で自然界を説明するように，セックスで人間の世界は説明でき，その範ちゅうに迷信もすべてのみこむことができると考えたのであった．私は〝真顔で語る〟と言ったが，冗談を冗談めかしく語ったのでは冗談にならぬのであって，この冗談が弟子や同僚たちをなやませたのであろう．しかし〝二人行脚〟をよくよんでみると，たとえば言葉のやりとりの主体が大馬鹿三太郎であったり，骨折五九郎であったりしているのであって，これはやはり日下部のジョークであり，一種の滑稽文学ではなかったかと思われるのである．この滑稽はもちろん迷信退治の分野をこえ，彼自身の物理学分野にまでも及んでいった．そのような例を二つだけあげてみよう．

ハリー彗星が地球に接近して地球との衝突が伝えられたとき，小倉淑成は大学の図書館でバッタリ日下部に出会い質問した「彗星が地球に衝突しても大丈夫ですか」日下部はすかさず答えた「君の顔に屁をひっかけても大丈夫だろう．密度の差だね」

日下部は大正13年7月1日丹毒でくるしみのうちになくなったが，最後の言葉は「ぼくの心臓を座標の原点にとり，Zの軸を垂直の上向きに，Xを右の乳の方向に，Yをそれに直角の方向にとる．この座標軸にアインシュタインの Transformation（変換）を施す！」であった．

（根本順吉）

訃　報

氏　名	住所または勤務先	死亡年月日
川野　実	名古屋大学工学部原子力工学教室	昭和48年1月31日
植田利政	加古川市神野町西條山手町2丁目	〃 48年3月21日
曲田光夫	気象研究所予報研究部	〃 48年3月27日